

流川及び「名残橋」探索

衛藤 秀子

今年の夏の市内探訪で竹瓦界隈と流川通りの周辺を探索した。そもそも流川は現在の流川通りを流れていたと思われている市民が多いと思われるが少し違います。そこで、是永勉著『別府今昔』から「流川は今も」の一部をお借りして、流川を再現してみましよう。

「流川は今も」

青い藻草が川底の流れにゆらぎ、川面からは湯気が暖かく立ちのぼっていたという流川は、現在の日名子ホテル（日名子センチュリー、デオデオ）の下角までは田の湯↓不老泉↓村橋病院↓極楽庵（現三味堂の駐車場）のコースで下ってくる支流と、日豊線流川ガード下あたりから亀の井ホテル前で、南にカーブしながら中村病院の裏をかすめ、北に曲がって日名子ホテル（同前）の地下を横切った支流の二つに分かれ、ホテルの下角で二つの

支流が合流、花見屋（現井上宝石）↓山止かご店↓菊家（現マルシヨク）側の軒下を流れ下った。（現在ここまでは暗渠として流川通りの下を流れています。）

菊家の前から吉村薬局の前に来ると、南にカーブ、伊予銀行（現菊家）の真下を「かねますや」（現小楽天、いろはずし）と片桐眼鏡店（現電気マッサージ）の間に抜け、楠銀天街を横断、若木屋土産店（現ココストア）の南側を寿温泉の前に出て、柳湯（現駐車場）の裏から和田彦本家（現和田彦ビル）白水館↓紙屋旅館（現トルコ）の裏を流れ（この流れは現在も見られる）、“チョロマツ”（現寿苑ガレージ）の横をくぐって電車通り（二〇号線）の下、関西汽船別府支店（現楠港埋立地）の地下を海に出ている。出口は棧橋の南側、最近駐車場として埋め立てられているあたりが昔の川口である。

しかし流川と呼ばれる水脈は、下流に来ると、現在の楠銀天街から東洋軒（現トルコ・ポエム）の角に出る道のところ（現寿温泉の前あたり）で、楠町の岩尾米造宅前（現駐車場）↓スバル座前（現長寿荘あたり）を流れていたもう一つの支流を加えて、東洋軒（同前）の前のあたりでは川幅が急に広がっていた。船はここまで上

がっていた。水深もこの辺までは深かった。

さて流川と云う川に架かっていた橋の一つが「名残橋」です。場所は今の菊家さんのあたりでしょう。名前の由来も流川周辺・浮世小路あたりの遊廓からの帰りに名残りを惜しんで渡った橋と云うことから名づけられたとか。そしてその橋に「名残橋」と云う石柱の標柱が立てられていたようです（写真参照）。今は菊家さんの計らいで、お店の前に「名残橋」と記したレプリカの標柱が立てられています。この漢字の「名残橋」について、また「別府今昔」から次の一文をお借りしましょう。（一部略）

軒下を川が流れている家は、石橋や厚板を流川通りの道との間にかけていたが、橋らしい橋は港町と楠浜との境になっている湊屋旅館の北裏の““チョロマツ”の所に木の橋があって、永楽家の前に出ていたのと、和田彦本家の西側に柳町と“だんご町”に抜ける橋、そのすぐ上流の寿温泉と川村竹土産品店（現駐車場）の所に楠町に渡る橋があって、その上流、流川通りに出る所が有名な名残橋。伊予銀行支店（現菊家）と吉村薬局の間の前の道路が名残橋の橋になるわけで、大きなしだれ柳が橋のたもとに美しかった。



大正初期の流川・右奥が名残橋 小野弘氏提供

もともとの標柱は石柱で、『別府今昔』によれば、「高さ七〇セ・三〇セ角の御影石」で、表に行書で「名残橋」、側面に「石工野田村有永長太郎、別府村安部房吉」と彫ってあった。発見された場所は菊家さんの向かいにあったエッチ美容室（現エッチ美容室の前身）の床下であった。

現エッチ美容室社長の林氏によれば、「昭和四〇年、床下の改修工事をおこなった際、土の中を一、二尺掘り下げた所から石柱らしいものが見つかり、はじめは墓石が出たのではと驚いたが、よく調べると『名残橋』の彫刻のある石柱であった」という。

林氏によれば、石柱を何とか保存したいと思い、近くの瀬戸電機商会さんに保存方をお願いしたという。現在は縁あって塩月覚さんが保存している。元の発見地には別の美容室がある。

なお『別府今昔』には、ここから五、六間上の元浜田楽器店地下（現国内信販楽天）からも「なごりばし」とひらがなで彫った同じ大きさの同質の石柱が掘り出されたが、これには「明治二十一年四月」と建立年月が記され、石橋に掛け替えられた時に作られたのではと推定している。この所在については今の所分かっていない。会員の協力を得て行方を探し

てみたいものです。ご存じの方はご一報下さい。



旧エッチ美容室床下より発見された名残橋石柱 塩月覚氏蔵